③は Ferris (1951) の key によると *P. alaskensis* に当るが原記載を参照すると明らかな別種である。今日のところ本種に該当する種は記載されていないと思われるが手許にある標本は僅かに 1 ♂ 1 ♀ であるから種名の確定は後日にまつことにする。長谷川(1953)が北海道のエゾヤチネズミから①として報じた虱は本種である。④は *Clethrionomys* に普通に見られる。佐々(1953)は北海道のエゾヤチネズミに極く普通の虱を多少の疑問をもつて *H. affinis* と同定された。私達は此の種類は見出すことが出来なかつた。⑤は *H. akanezumii* の原記載とは側板の形態で重要な差異が認められるが別種とも断定し得ないので当分 *akanezumii*? として取扱うことにした。⑥は内地の *Rattus* には極く普通であるらしいが北海道の *Rattus* には甚だ少数しか見られなかつた。なお本報の詳細は本研究所報告第 8 号に掲載される。

(北海道・衛生研究所)

コレートを餌とし、水と過飽和塩類溶液 (KNO_3 , KCl , NaCl , $\text{K}_2\text{CO}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$) で湿度を調整し 25°C で餌育した場合は、75 % R.H. が繁殖数最も高かつた。42 % R.H. では 1 日で死滅した。b) チーズでは 84 % R.H. が繁殖数最も高く、湿度 100 % R.H. ではチーズ変質し 1 週間で死滅し、42 % R.H. では 4 日で乾燥死滅した。c) 米では 24°C で湿度 100 % R.H. が繁殖数最も高かつた。以上繁殖と温湿度の関係は食物自体の水分含量、吸湿、変質等にかなり左右される。3. 繁殖と個体の発育期別の推移をみると、繁殖の進展につれ供試集団の新しい環境に於ける若返りの現象を認めた。2 週間後に個体数は大体平衡状態に達し、3 週間後には完全に若い期のもの程多い繁殖力の大きい集団に発達していた。このことからケナガコナダニ *Tyrophagus dimidiatus* の一生活史は 20°C , 75 % R.H. では 3 週間内外であると推定される。

(伝染病研究所)

コナダニ類の生態に関する研究

飯室 勇 三浦 昭子
佐々 学

Iimuro, I., Miura, A. & Sasa, M.:
Ecological studies on the acaroid
(Tyroglyphoid) mites

当研究室ではコナダニ類の分類、生態、駆除、病原性等の一連の研究を行つており、今般はその一部として生態に関する研究成績を報告する。我々はケナガコナダニ *Tyrophagus dimidiatus* を大量に飼育しチーズ、チョコレート、米を餌として温湿度の影響、繁殖量及び繁殖時に於ける個体の発育期別の推移に就いて観察した。実験成績を要約すれば、1. 温度の影響、a) 過飽和食塩水を使用、概算湿度 75 % R.H. で、37, 28, 25, 20, 及び 15°C の各温度に於いて、チーズを餌として飼育した場合： $20\sim 25^\circ\text{C}$ が繁殖最も旺盛であつた。 37°C では 1 日で死滅した。b) 顕微鏡用加温装置を使用、熱電堆で測定した高温の影響に就いてみると $50, 47^\circ\text{C}$ の高温では 1~2 秒で瞬間的に乾燥死滅、 45°C では 2 分 7 秒、 42°C では 7 分 42 秒、 40°C では 11 分 17 秒、 38°C では 15 分 58 秒、 35°C では 52 分 15 秒で完全死滅し、高温低湿環境の抵抗性は極めて弱いのを認めた。c) 冬季屋内 $1\sim 14^\circ\text{C}$ 76 % R.H. チーズでの観察は、低温によりすべての活動は阻止され、繁殖は殆んど認められなかつた。d) 電気冷蔵庫 $1\sim 5^\circ\text{C}$, 76 % R.H., チーズでの実験結果は、5 週間後の生存率は約 25 % であり、殊に後若虫の生存数の多いのを認めた。ダニは完全に休眠し、活動は全く停止していた。2. 湿度の影響、a) チョ

マダニ科 2 新種について

矢 島 朝 彦

Yajima, A.: On the two new species of
ticks (Ixodidae) from Iwate Prefecture

Ixodes sp. nov. 雄：不明、雌：体は卵円形で、顎体部、背甲、脚等は赤褐色である、体長 7 mm、体幅 3 mm、顎体部：吻基の後縁外角は鋭くとがり、角状体はない。多孔域は大形で亜三角形、口下片の歯式は大部分 2/2 であるが、先端は 3/3 となる。背甲：長さ 2.5 mm、幅 2.7 mm、肝臓のような形をして、幅は長さより明らかに大、後側縁の略々中央には深い切れ込みがあつて、裂片状をしている。点刻は一般に小形であるが、後部にあるものは大形である。項溝は深くて長い。脚：第 1 基部には鋭くて頑丈な刺を有し、内刺の方が大形であるが、何れも第 2 基節の上に重なっている。第 2~第 4 基節には太くて短い外刺のみを有す。気門板は円形である。採集年月日：昭和 24 年 8 月 8 日、採集地：岩手県川井村、宿主：牛。

本種は *I. ricinus* と *I. acutitarsus* に似ているが、次の諸点によつて明らかに区別出来る。即ち背甲の形がこれら 2 種は五角形、心臟形であること。口下片の歯式が前種は 3/3、後種は 4/4 であること。また第 1 基節の刺が前種は内刺が極めて長く鋭いが、外刺は極めて短い。後種は本種と同様 2 刺があるが、外刺の方が短かくて部厚いこと。

Haemaphysalis sp. nov. 雄：不明、雌：体は小形にして亜円形、体は赤褐色、顎体部、背甲、脚等は茶褐色である。体長 2.21, 体幅 2.0 mm、顎体部：角状体は